

神病院は一八七九年の東京府(一五〇頁)となつてゐるが、京都の癲狂院はそれよりも早く一八七五年の設立であり、また「病院の典型といへば国立あるいは公立の医学校に併設されたもの」(三二五頁)とあるが、日本では多くが病院付属医学校にはじまつて、のちに医学校付属病院となつたのであり、また「神山(かみやま) 復生病院」(三四八頁)は「こうやま」の訓みが正しい。

(新村 拓)

〔太陽出版、東京都文京区本郷四一―一四、電話〇三(三八一四)〇四七一、二〇〇五年二月、A五版、六三八頁、本体価格四八〇〇円〕

安藤 優一郎 著

『江戸の養生所』

本書は、山本周五郎『赤ひげ診療譚』や黒澤明の映画『赤ひげ』などで知られている小石川養生所を取り上げた新書判の本としてきわめて興味ある内容を示している。それは、新書判というサイズと分量の中で、養生所の成立から終焉までを実に多面的に論じているからである。

本書の構成を示すと、「プロローグ 江戸の養生」(第一章 大都会・江戸の医療事情)「第二章 町奉行大岡忠相と小石川養生所」(第三章 養生所の入所生活)「第四章 寛政の医

療改革」(第五章 養生所の病巢)「第六章 養生所改革の挫折」(エピローグ 養生所の終焉)となつてゐる。「プロローグ 江戸の養生」では、養生所設立の背景としての江戸の養生文化の概要を略述する。第一章では、江戸の医療事情が決して劣悪な状態ではなかつたこと、養生書をはじめとする医療情報が氾濫してゐたといった指摘がなされてゐる。これらの指摘はもちろん正鵠を射ている面もあるが、一方で概括的に過ぎる記述もいくぶんか見受けられる。第二章では、小川箒船による目安箱への上書を契機として、小石川御薬園内に施薬院が設けられ、それが「養生所」として治療を行つていく経緯が論述されている。この章と次章「養生所の入所生活」では、一次史料に丹念にあたり、設立当初の養生所の全容を伝えることに成功している。また、代々養生所の肝煎を務めた小川家についても筆が割かれており、評者も学ぶところが多かつた。

第四章、第五章、第六章では、江戸後期以降の養生所の変遷、それは運営難と改革の挫折の連続とでもいふべき苦悩の時代といえるものであるが、そうした養生所における内外の課題との格闘のさまを描き出している。そこで筆者が触れている点で興味深いことは、寛政以降に養生所の入所者が減つていく理由を、寛政改革によつて設けられた町会所による救民活動とのバランスの關係でみている視点である。すなわち、町会所による救民活動はいわば生活扶助であり、養生所における治療とは異なり、庶民の生活危機を総体的に救済できる

側面をもっていた点にあるとしている。この視点は、こんにちの医療福祉と社会福祉にもつながりうるものである。この町会所の研究は、著者自身の博士論文として別に大著がもたれている。このような点と同時に、第六章で述べられている養生所の医師たちの診療水準のばらつき、薬種料の少なさによる投薬忌避、与力・同心の職務不熱心などによる養生所の衰退は、読んでいて痛々しい思いすら感じさせられた。ついに養生所がその命脈を絶たれる契機が隣接地での鉄砲射撃訓練の開始であったことも意外な点であった。

全体として、明快な書きぶりであり、要所で必要な実証を加えており、その記述には教養書の水準を超える分析が施されている。ただし、プロローグとエピローグで江戸の養生文化と養生所の深い関連を論じているが、庶民の養生の思想および文化と庶民の受療実態とは相関性はあるものの同系統の事象として整理し難い面もあるので、その点についてはもう少し詳しい注記を望みたい。とはいえ、これは著者の卒業論文がもたっているという。梅檀の香りを感じさせる秀作をみた思いがする。

(瀧澤 利行)

[PHP 研究所二〇〇五年一月、七二〇頁]

カイブル編、酒井 シヅ 監訳

『疾患別医学史』I・II・III

原著は K.F.Kiple 編の *The Cambridge Historical Dictionary of Disease* (Cambridge University Press 2003) であるが、その原典は *The Cambridge World History of Human Disease* (1983) の第八章にあたる。それに三項目を加えて辞書形式としたものである。原典執筆は米国九二名、英国一四名、カナダ五名、スイス二名、フランス二名、スペイン一名、ペル一名一七名が担当。一五〇種の疾病について特徴と歴史をまとめたもの。酒井シヅ (順天堂大)・大西由希子 (朝日生命成人病研究所)・梶谷真司 (帝京大文学部)・香西豊子 (日本学術振興会)・小林武夫 (帝京大市原病院)・小林由 (昭和大学横浜市北部病院)・坂井建雄 (順天堂大)・澤井直 (順天堂大)・嶋田淳子 (群馬大)・松村紀明 (東京大学)・柳澤隆昭 (東京慈恵会医大)・柳澤波香 (青山学院)・津田塾大 氏らの十二名で分担翻訳した。

酒井シヅ氏が監訳し、三分冊。全七三五頁の大部の医学史書としてまとめられている。

医科・保健科・文科のエキスパートのスタッフであるが、総合的な翻訳作業は大変なことであったろうと推察される。

原編者の序文によると「全体のヴォリュームをよりコンパクトにするために、元の本にあった膨大な文献と図版を割愛した」とある。